

# 地域・子ども・大人の「関係をつなぐ」(1)

—東横学園女子短大

子育て支援センター「ぴっぴ」の取り組み—

お話 小川 清実

聞き手 首藤 美香子

「『ぴっぴ』に行くよ」と声をかけると、ぐずっついても泣き止むという子どもたち。「『ぴっぴ』があったから、育てられた」「こんなところがあったら、私、もう一人産むわ」と、来訪者が妊娠して、「生まれました」

と赤ちゃん連れで遊びに来る。「ここがなかったときのことを思い出せません、どうやって孫を育てていたかわからない」というおばあちゃま。「私の国でもこんなサービスをやってみたいわ」という外国人。

少子化対策の一環としての子育て支援施設が、大学の常設機関としてはじめて設置され、地域の親子が月曜日から土曜日まで利用できることとなった東横学園女子短大子育て支援センター『ぴっぴ』。二〇〇四年四月に三年制の保育学科が新設されたのに伴い、時代を担う質の高い保育者養成と地域貢献を掲げ、同年六月一日に開設されてから一年余りがたつが、一度訪れた親から友人へと口コミでその評判が伝わり、一日の利用者が六十組近く、百人を超えるほどの支持を得ている。五月末現在まで（初年度一年間）の利用者は、のべ二万六、六八一人で、その目覚ましい成果に注目した厚生労働省や地方自治体関係者、教育機関からの見学も多いという。

保険料として一日百円の利用料を取る以外、年齢や時間帯による入場制限は特にない。デザイン性豊かで安全面に配慮された木製の手作り家具や外国製の珍しい遊具が置かれた百六十平米のオーブンスペースは、赤ちゃんから就学前までの異年齢の子どもたち、そして障がいのある子どもや外国人の子どもが出会い、混雑時はお互い

を気遣いながら遊ぶ。子どもたちは、母親や父親だけでなく、祖父母やベビーシッターさんに伴われており、家庭環境や子育てに対する価値観の違いを乗り越え、成長のひとつときを共有できる場となっている。

『ぴっぴ』には常時、専任の保育士が就いているが、保護者に代わって子どもを一時的に預かることや、専門家による子育て相談・指導といったことは特別にはしていない。地域の子どもたちが気軽に遊びに来られる場を提供していくなかで、子育てに関わる大人一人ひとりが責任と自信を持って子どもと向き合い、自然に学んでいけるよう、地域に生きる子どもと大人の「関係をつなぐ」ことを大きな目的にしているからだという。

「ここに来ると、なんだかほっとする」家にいるときよりも子どもに優しくなれる」という『ぴっぴ』の魅力と理念を、運営責任者である同短大保育学科長・小川清実先生に伺ったので、本誌で三回にわけてご紹介したいと思う。

（インタビュー 平成十七年一月二十八日）

## 出産してはじめて気づいた地域のつながり

—— いつ頃、どんなきっかけで、子育て支援の必要性を認識されたのですか。具体的なエピソードを挙げてお話しただけだと思います。保育研究者として、近年の子育てを取り巻く変化の兆しや危機感といったものがあつたとしたら、漠然としたものでも結構ですからお話しください。

小川 私自身が母親になったときからだと思うのだけれども、母親だけ、またはあるひとつの家庭だけでは、子どもは育てられないということです。これは実感で、私自身、子どもを持ったときに一番感じたことかなと思うのです。

それまで仕事をずっとしていたでしょう。もちろん仕事をしながら産休をとって、子どもを産んでという形で母親になりましたが、「仕事を持っているというのとはどういうことか」というと、「その地域のことを何も知らなかった」ということなのです。子どもが生まれて、

お散歩で外に出られるようになる時期があるでしょう。そうすると、「あら、ここにこんな子どもがいたの」という、その地域の親子ぶりをはじめてわかったということがあります。

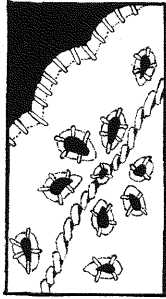
私は仕事を持っていたからわからなかったけれども、私の家の通りには、上の子と同じ年齢の子が何人もいたのね。その路地は、子どもがわいわいと遊んでいるから、昼間は車が入ってこないようになっていて、いろいろな子どもたちが集まる遊び場になっていたということも、私ははじめてわかったのです。「ああ、そうか」と思って、公園デビューなんていうことも全然なく、公園に行くよりも、まずその路地で、子どもはほかの子どもを知り、私もほかのお母さんたちと仲よくなった。

うちは、おじいちゃん・おばあちゃんが一緒に所帯でしたが、お互いのことは、ずっと一緒にいなければ、よくわからないでしょう。育休してずっと一緒にいることで、少し窮屈になったりすることが、あるでしょう。だから、私も子どもを連れて、外に遊びに行っちゃうわ

け。

そうすると、そこでだんだん「お昼ご飯食べない？」とか、「おやつを一緒に」という関係ができてきた。その路地に住む人たちは、下町出身の人がたまたま多かった。それから、ご主人の転勤で地方から東京へ来たという方たちもいた。私は、子どもを連れて出入りできる家というのが四軒あった。うちもそういう家になっていったから、五軒ぐらいの家を、子どもたちも自由に出入りしていた。

だから、うちの子は、言葉をまだあまり言えないころから、ひとりでトコトコ出て行って、いつも行っているおばちゃんの家にも言わずに入っていて行ってね、みんな開けっ放しだったの。いい時代で、玄関を閉めてなかったの。どの家もすべて開放的で、「どうぞいつでもお上



がりください」だったわけね。その家に入っ  
て、その家の冷蔵庫を  
あけて、何を食べよう

かと眺めていたときに、「冷蔵庫を開けちゃだめよ」なんて、よその家のおばさんに怒られたりして、そういう関係が、とてもあったの。

「何時に誰その家に集まって」なんていう（お誘い）がいつもあって、私は仕事の都合でベビーシッターさんを雇っていたけれども、そのベビーシッターさんが家にいる時には、他の子どもが遊びに来てくれたり、とても自由にやれたのね。私もよその子を怒っていた。そういうふうになり合えるような関係の仲間がいたということが、実はすごくありがたかった。

### 親の一番の悩みは親同士の交流がないこと

小川　うちの子どもがまだ幼かった頃、地域の公民館が主催している「幼い子どもを持つ親の講座」というのがあってね。毎週一回、何か月間か続く長い講座に、講師として参加しました。そこで出会った親たちのいろいろな話を聞いていると、親が一番悩んでいるのは、「親同士の交流がないこと」で、そのために死にたくなってい

る人がいたことなのですね。

例えば、夜泣きですごく大変な子どもを抱えているというお母さんが、「なぜ自分はそれを越えられたか」という話をしてくれるわけ。そのとき、「この子を殺して自分も死のうと思った」というところに至るまで、涙ながらに話すの。それは大体、結婚して知らない土地にやっできて、そして誰も友だちがいない。つまり、友だちといわないまでも、大人同士で話す相手がなくて、子どもが生まれて、やっ歩いていく中で、どんどん困っていつちやう。

特に夜泣きがひどい子を持っていて、ご主人は疲れて帰ってくるので、夜ぐらいいは寝かせてあげたいと。夜、どうしていたかという時、その人は、ずうつとおんぶか抱っこで、夜中じゆう、外を歩き回っていたというの。そういうことを、ずうつと一人だけでやっていたら、これはおかしくなるでしょう。

その人は、昼間、泣く子を抱っこして道を歩いているとき、近所の少し年配の人、ここの家の人だというのは

わかっていても普段は話さない人に出会って、どういうはずみだったか、「この子は夜泣きがひどくて、本当に大変で」と、ふつと言ったらしいの。そ

したら、その年長の人が「あら、よく泣く子って頭がいいっていいですよ」と言ってくれたというのね。その一言で、そのお母さんは本当に救われたわけ。「この子は、今、泣いているけれども、頭がいいんだ」と……。

私は、その話を伺った当時、「よく泣く子は頭がいいか」ということを調べたのね。(笑) そうしたら、それに近いようなことわざが長野にあったの。よく「寝る子は育つ」と言うけれども、「泣く子は育つ」というのがあった。

子どもは泣かないと育たないでしょう。泣いていいわけでしょう。でも、一人でそれを相手していたら大変。



けれども、いつも自分が抱っこしている子を、たまに違う人が、「ほら、抱っこしてあげるわよ」と、代わってくれたら、ちよつとうれいでしょう。(子どももつて) ずつと困るけれども、ちよつと困らないと助かるというか、ちよつとほつとする。

やっぱりそういう関係が、昔はあったと思うのね、地域があつたから。けれども、今のお母さんたちは、そういう意味で、地域がない。一人だけで育てている。それで、「完璧」に育てようとするの。よくご存知でしょうけれども、「本当に完全に、すべていいことだけで育てよう」とするから、今の子育ては、それはそれは大変になつちやつているのね。

### 人間関係を築くのが気楽ではない

——それぐらい、今の親の「子育て力」が低下しているということでしょうか。

小川 「子育て力」以前に、親同士の友だちが作れない。これは、本当に大変な問題だと私も思うんだけど

も、世の中、すごく殺伐として……。だから、人間関係が強い緊張関係にあるの。今、短大生でも、友だちは三人ぐらいいれればいいわけ。まず、今の学生たちは、コンパがないでしょう。コンパをやらない。食事でも何でも、一緒にいてわいわいやるというような体験が随分なくなっていると思う。

例えば、短大では一応クラス分けをしているでしょう。ところが、クラスの人でも(お互いのことを)知らないことが多い。「○○さん、今日、どうしたのかな?」、「え? わかりません」と。わかるのは、四、五人のグループ内のことだけ。他の人には関心がない。この短大も割とそうだというのはいただけけれども、どうなつちやつているのかしらと。その数人のグループ、それだけで卒業していつちやう。

もう一つは、その数人のグループで、何かうまくいかないときがあるでしょう。きつかけは、例えば、みんなトイレに行こうとか、そんなレベルのことだけれども、そのときに、「私、今、行きたくない」と言っ

ちゃつたとする。そうすると、そんな単純なことで、そのグループから外されちゃうなんていうことが、短大生であるのよ。そうすると、その外されちゃつた子が、「もう学校に行きたくない」くらいに大変なの。外されたら一人でいればいいし、だれか他の人を見つければいい。ところが、お昼ご飯は誰と食べたらいいかとか、とにかく大問題のようなの。一人で食べればいいと思うけれども、一人で食べることが寂しいとか、何かいろいろなことがあるのね。

—— どこかに帰属していないと不安でいたたまれない。

小川 そう。大学もやめたいぐらいに悩んじゃう。そういう子が将来はお母さんになっちゃうわけでしょう。

ある地域の公民館の講座で出会った三歳のお子さんを待つお母さんが、そのうちようど十一月ぐらいだったかな、そろそろ幼稚園を決める時期で、「決まったんですけど」と、（私の前で）ぼろぼろ泣くの。行きたくない幼稚園に決まったのかしらと思ったら、「決まったの

はいいのですけれども、私が不安で、不安でしようがないんです」って泣くのね。なぜ不安かというと、「幼稚園のお母さんたちの輪に私が入れるかどうか不安です」と。「お母さんたちのグループも幾つかあって、そのどこかに所属しないと、とても行きにくいというのを聞いて、私が所属できるかどうか、すごく不安で」と、入る前から泣いちゃって……。子どもの心配じゃなくて、自分の心配。わあ、大変だと思ってしまう。それほど、人間関係を築くのが気楽でない。

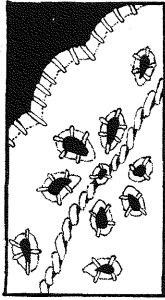
子育て中って、「何歳？」とか、「何月に生まれたの？」、「一緒ね」とか、「最近ご飯を食べないの」、「うちはこうしてみたら食べたわよ」とか、そういうふうに気楽にいろいろ相談しながら育てていけば、そんなに大変なことではないはずなのに、気楽に声かけられない。

### 親と子との不安や不満を取り除く

小川 『びっぴ』という場があるのがどうしていいのか

というと、例えば、普通、公園だったら、何かぎくしゃくしちゃうと、そこで人間関係が切れてしまうわけ。でもここだと、お母さんと話して、もし何かうまくないことがあっても、保育士さんがいるから、保育士さんに直訴できるでしょう。「あそこにいるお母さんが、自分のお子さんのことを全然見ていないので、うちの赤ちゃんとおつかつちやった」と。「だから注意してください」なんて言うお母さんもいるの。直接（自分からは）苦情は言えない。子どものようだけれども、保育士に訴えてくるお母さんもいらつしやるの。

だから、そんな時は「はい」と応えて、もちろん直接（当事者に）わかるようには言わないけれども、それとなく「赤ちゃん、どこかおかけしました？」という形で。おつけられちゃった方のお母さんは不安なわけ



しょう。そういうことで、今のお母さんは、不安だらけなのです。

『びっぴ』は六月一日

に始まったのだけれども、六月中は、その「不安と不満」がとても多かつたのよ。ここは年齢制限もしていないでしょう。十時から四時、ゼロ歳から就学前。午後になつたら、幼稚園帰りの親子が遊びに来る。そうすると、「ここは乳幼児のための施設でしょう？ 幼稚園に行っているお子さんは乳幼児ではないですよね？」なんて言うお母さんもいる。「一応、就学前までですから」と。「そんなことを言ったら、あなたのお子さんは、今、一歳だけれども、三歳になつたら、来られなくなっちゃう」ということが、見えないのね。危ないから時間制限してほしいなど、当初は要求がすこかつたの。

（異年齢の子どもが集うことで）「あなたのお子さんは、今はこうだけれども、一年たつたらああなる、二年たつたらこうなる」というのが、見えるでしょうと。「こういう機会があると、ちょっと大きい子たちのあとをついて歩くわよ、あとについて歩いている子がいるでしょう。どんどん真似していると成長が結構早いわよ」と言って、一緒にいることの大事さを、小さい赤ちゃんだ



けを持っているお母さんには伝え、ちよつと大きい子のお母さんには、「ここではお母さんただけのおしゃべりはできません」、ということ伝えるにはどうしたらいいかということ工夫しました。

大きい子どもは、まず「わーっ」と走る。ものすごくよく走るから、「ここは赤ちゃんがいっぱいいるところだからね」ということで、直接子どもにも声をかけていたの。「赤ちゃんにぶつからないようにね」と。あの子たちは、普段、ぶつからないように気をつけて歩いてはいないの。普通は兄弟で下に赤ちゃんがいれば、気をつけるでしょう。『びっぴ』は赤ちゃんがいる。だから、気をつけて歩こうとするようになった。今はそれを確実にわかってくださっているから、親も気をつけてくださっている。

時々ぶつかる事故もある。ここでは、すべて親の責任ですからね。今のところ、大きなけがは滑り台から落ちたこと。滑り台から落ちていますよ、親の目の前で。親

がついていても落ちる。「病院に行ったほうがいいんじゃない？」と言って、病院に行ったケースが二つあった。でも別に大きなけがではない。保険の請求は、まだありません。

親の不安をなくすために、ここでいろいろな親子を見てもらって、自分とは違う育て方を見てほしいと思つています。

〈次号へ続く〉

#### ☆児童学からの出発

子どもをめぐる社会文化状況の激変と顕在化する今日的問題に対し、子ども研究・実践の分野でご活躍中の方々がどう認識し、どのような対応策を模索しているのか、インタビューを通して紹介するシリーズです。児童学という学際性豊かな分野が、時代とどう向き合おうとしているのか、その真摯な姿勢をお伝えできればと思います。